

ヨハネによる手紙第一2章3-6節 「神を知っている人」

1A 命令を行う者 3-4

1B 神を知っている者 3

2B 命令を守っていない偽り 4

2A 神のうちに留まる 5-6

1B 全うされる神の愛 5

2B イエスのような歩み 6

本文

ヨハネによる第一の手紙 2 章を開いてください、私たちの学びは、前回 1 節と 2 節を見ました。ヨハネが手紙の中ではっきりと、その書いている目的を伝えていますが、それが「**罪を犯さないようになるためです**」でありました(1 節)。たとえ罪を犯しても、私たちには義なるキリストが、執り成しをしておられるということを見ました。その続きです。

1A 命令を行う者 3-4

1B 神を知っている者 3

³ もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。

ヨハネは 1 章で、「**神と交わりがあると言いながら(6 節)**」という言い方をしていました。ここでは、「**自分が神を知っている**」ということを行っています。当時、グノーシス主義という異端が、特別な知識を得てそれによって神に近づき、神と交わるということを行って、彼らこそが神を知っているという、霊的なエリート主義を掲げていました。そこで、ヨハネは、神と交わっているというならば、また神を知っているというならば、ということを行っています。

ここでヨハネが使っているギリシア語は、「ギノースコ γινώσκω」です。これは、知的に知っていることではなく、経験や体験によって知ることです。アダムがエバを知ったという時に使うような、「知る」であります。知識の上で知っているのではなく、神を知っているのです。イエス様が、ご自分を「主よ、主よ」と言っている人の多くが、天の御国には入れないことを語られましたが、「**マタ 7:21 天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。**」とされています。そして、彼らが、「**あなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。**」と言ったら、「**わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。**」とされます。預言を行い、悪霊を追い出し、奇跡を行っているのにも関わらず、それでも「**おまえたちを全く知らない**」と言われるのです。知るということが、人格的に、親密な形で知っているということを示しています。

けれども、グノーシス主義者もそうですが、神との体験があるのだと主張する人が多いです。何か特別な体験があったから、だから神を知っていると。けれども、ヨハネは4章で、「4:1 霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。」と言っています。そして今、マタイ7章にあるイエス様の警告を引用しましたが、そこにも預言したり、癒しを行ったり、奇跡を行っていても、それでも偽物である場合があります。パウロは、偽使徒、人を欺く働き人がいるけれども、「Ⅱコリ 11:14 驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。」と言っています。

では、どうやって、その人が神を知っていると言えるのか？「もし私たちが神の命令を守っているなら」というところで分かります。ヨハネは、福音書でイエス様が捕らえられ、十字架に付けられる直前の晩に語られたことを、多く語っておられます。「14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」「14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」「14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」「15:10 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。」「15:14 わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。」主の命令に従順であることに、私が神を知っているかどうか、はっきり分かることが分かります。

しかし、ここで気を付けないといけないのは、イエス様は神の愛の中で、戒めを守っているかどうかを語られていることです。神を知って、神を愛しているというのは本心です。神に愛されて、それへの応答として、神を愛しています。その愛というのが、従順というものによって、最もはっきりした形で出てくるのです。ペテロが、三度、「わたしを愛していますか？」とイエス様に尋ねられて、「愛しているのは、貴方がご存じです。」と答えると、「羊を飼いなさい」と言われましたね。ペテロはその後、教会の指導者となり、きちんと羊を養う務めを行いました。その反面、放蕩息子の話では、兄息子は、弟の祝宴について怒って、そこから離れてしまいました。父の戒めを守っているはずが、心は父から離れ、父が捜していたものを見つけた喜びを、共に喜ぶことができなかつたのです。ですから、愛なしでは、真実な意味で戒めを守ることができません。同時に、愛というものは、従順のところに最も良く現れるのです。

2B 命令を守っていない偽り 4

4 神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。

これが、グノーシス主義者の偽りであり、また、自分は神を信じている、神を知っていると言って

いる者たちの偽りです。再び指摘させていただくと、私たちは「言っている」ことで、その人と神の関係を推しはかろうとしますが、そこには惑わしが多くあり、「命令を守っている」というところで神を知っているかどうかを推し量るべきなのです。

牧会者のテトスにパウロが手紙を書いています。偽りの教えを広める者たちを厳しく戒めなさいと言った後で、こう言っています。「1:16 彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。彼らは忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適合です。」テモテにも、第二の手紙で、そういった人たちを警戒するようにパウロは教えていて、「3:5 見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」と言いました。

2A 神のうちに留まる 5-6

1B 全うされる神の愛 5

⁵しかし、だれでも神のことばを守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。それによって、自分が神のうちにいることが分かります。

ここで、「神の命令を守る」という表現から、「だれでも神のことばを守っているなら」と変わってきますね。ここは、もっと一般的なことを言っているのでしょう。命令と言えば、「こうなさい」というものですが、神の言葉は命令だけに留まりません。約束もあれば、慰めや励ましもあります。そういった、神のことばそのものを心に温め、留まらせているという感じです。

ヤコブも、この体験的な神の愛を言い方は違いますが、語りましたね。「1:22 みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。」そして、「2:22 あなたが見ているとおり、信仰がその行いととも働き、信仰はその行いによって完成されました。」その後で、アブラハムがイサクをささげなさいという神の命令に従って、それで、彼が義と認められたという聖書の言葉が実現した、と言っています。イサクを献げるという行為によって、そこで神の義とは何かを、彼は体験的に知ったのです。神が、その独り子を惜しまずに与えるという愛を、彼は神の目入れに従うことによって経験しました。

ここでの「神の愛が確かに全うされている」とは何か？先ほど引用した、ヨハネ福音書に出てくるイエス様の言葉に、それが表れていると思います。「14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」神は、まだ私たちが罪人であった時に、キリストを死に渡されたことにより、ご自分の愛を現されました。その愛は分かっているのです。しかし、その愛が全きものとなるには、つまり自分のものとなって成熟した愛の関係に入るには、神のことばを守っている中で実現します。

多くの人が、同意していることでもう十分だと思っています。そして、命じられたことを行いますと告白さえすればよいと思っています。けれども、同意とか、これこれをしなさいという約束では不十分なのです。主は、兄と弟の喩えを語られました。「マタ 21:28-30 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行っておいでしてくれ』と言った。兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。」思い直すとありますが、これが悔い改めの元々の意味で、同意以上に、実際にその方向性で歩いていくことです。

私たちが神の言葉を守っている時に、「**神の愛が確かに全うされている**」つまり、父の愛、キリストご自身の愛を体験します。私たちが、海外に宣教旅行に行って、外国の地に住みましたが、それは、イエス様が出て行って、すべての国民を弟子とみなさいという命令があったからです。その命令に従った時に、自分たちが、福音もなにもない土地にイエス様を伝えに行ったというよりも、そこに既にイエス様がおられて、そのイエス様を体験した、という感じでした。従順になることによってのみ、その愛の深さ、高さ、広さ、長さが分からないのです。

そして、「**それによって、自分が神のうちにいることが分かります**」とヨハネは言っています。これは、1章にあった「神との交わり」に関わることです。自分が神と結びつき、自分のうちに主がおられるだけでなく、自分が神のうちにいます。御子が御父のふところにおられたように、自分がキリストにあって父なる神のうちにいます。主が、聖餐において明らかにされる霊的真理をこう言われました、「6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」

2B イエスのような歩み 6

⁶神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。

「神のうちにいる」から、「**神のうちにとどまっている**」と言っていますね。ただ居るだけでなく、その中で生活している、住んでいるということです。そのように言うならば、(再び、出てきました、言っているだけでは、その人の霊的な立ち位置は分からないということです)「**自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません**」とヨハネは言います。

イエス様は、私たちが罪から救ってくださった方です。罪の救いについて、罪の赦しについて、そのいけにえになるということは、私たちは歩む必要はありません。罪のない者だけが、正しい裁きをすることができ、罪のない者だけが人の罪の身代わりになることができるからです。

けれども、この方の者となつてからは、この方は私たちがついて行く方、倣っていく方です。イエス様こそが、私たちの信仰の目標であり、この方から目を離さないのです。イエス様はヨハネの福音書では、最後の夜において弟子たちの足を洗われましたが、こう言われました。「13:14-15 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。」そしてペテロは、迫害や苦しみを受けているキリスト者に対して、こう言いました。「Ⅰペテ 2:21-25 このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰った。」主が罪人の忍耐を忍ばれたことを、私たちも見習うということでもあります。

私たちはキリスト教を複雑にしてしまいがちです。いろいろな神学と呼ばれているものがあり、その知識が膨大にあります。けれども、イエスが歩まれたように、自分もこの方にならって歩む、ということ以外に、他に大切なものは少ないです。そのことに献身していますか？日々、一步一步、着実な歩みをしていますか？

今回は、イエス様の命令として筆頭である、「互いに愛し合いなさい」の戒めを見ていきます。